

子どものいる暮らし―男・夫・父

子どもが出来て

子どものありがたさを知る

西原 彰宏

結婚する前、家のなかで大きな木のようになりたいと思っていた。木陰では人が憩い、枝のあいだでは小鳥たちが安心して遊ぶ、そこにくとどんな生き物もほっとし、安心するような大きな木のようにありたいと思っていた。しか

し現実の私はそれからはるかに遠い。せめて、人が人と一緒に生きいきと暮らしていくうえで大切なことについて、私は子どもから教わる立場だということだけは心していようと思う。

保育を仕事とするようになって六年目に自分

の子どもが生まれた。はじめのうち家で子どもとつきあうことは、学校で子どもとつきあうことと変わりはないように思えた。それからさらに六年が過ぎた。その間、長男には四歳年下の弟ができた。二人の子どもが大きくなるにつれて、職業的保育者であることと父親であることにはちがいもまたあると思うようになった。

保育は日中数時間の仕事である。保育者は、事務の仕事が山積みになっていても、その数時間は子どもとしっかり向き合おうとする。大人の心がどこかよそにあっては子どもは満足しないからだ。ある意味では、このことは保育者にとって救いでもある。その時間どうあがいたところで事務などできない。「今は子ども、事務はあと」と割り切り、安んじて保育に没頭すればよい。

ところが家庭ではこれがうまくいかない。四

六時中顔をつきあわせていると、仕事用の大人の顔と子どもに應える顔を時間によって切り替えるということができなくなった。もともと子どもを育てるといふ営みは、大人の常識ではほとんど両立不可能と思われるふたつのことから、両立せよと子どもから要請されることが多し。そのことは、保育の経験からよく知っているつもりだった。しかし、家庭では自分の今の力の限界が露骨にあらわれる。私はいままで、「保育時間」という枠で守られていたのだと



知った。

自分の限界を

つきつけられる場としての家庭

子どもが生きて呼吸する空気を平和に保つのは大人の責任である。親の不機嫌はなにより家庭の空気を汚す。そう理屈ではわかっていても、実行しがたい時がある。

ある朝のこと、私は朝食もそこそこに台所の換気扇の下にいき、煙草を吸いながらまた仕事上の問題を考えていた。その一週間ほど前、私どもの学校が所属する組織全体のやむをえない事情で、学校の狭い庭を削って他の部門の建物を建てるのが明らかになった。すでに設計まで終わっていた。私は、学校に相談なく決められたことに怒っていた。それ以上に、組織全体にとっては、赤字の学校は邪魔なのではないか

と私は疑い、学校の存立の危機を感じていた。さかんに長男が私に話しかけている。なんとか長男のほうに向き直ろうと

するのだが、頭はずぐ学校の問題に帰っていく。私はなま返事を続けていた。長男に話しかけられることが辛かった。突然妻が「お父さん、怒ってるでしょう」と言った。（家にいるときになせ子どもに向き合えないのか）と妻は暗に言っていた。即座に私は「怒ってるよ」と言い放った。声は知らずに怒気をはらんだ（こんな時に、これ以上どうやって子どものほうに向き直れというのだ。この一週間、怒っていることを子どもにさとられないようにするだけでオレはせいっぱいだったのだ）。一瞬の後、



長男が声をあげて泣きはじめた。朝食を途中でやめて、大声で泣きつづける。私はやさしい声をつくり、「お父さんは君に怒ってるんじゃないよ。仕事のことが大変で、そのことで怒ってるんだ」と説明した。しかし長男は泣きやむ気配がない。それを見て、私は自分の考えの浅さに気づいた。

子どもは大人の感情を写し取る

長男は自分がしかられたと思って泣いているのでは、もともとない。私が仕事のことでは頭がいつぱいになっていることも私が怒り続けていることも知ったうえで、私に抗議して泣いている。私が怒り続けていることが苦しく悲しく、そのことを怒っている。私は、仕事上の苦しみ子どもたちに隠しおおせていると思っていたのだが、実際にはそれは感じとられていたの

だ。私はその一週間、自分の苦しさ、悲しさ、疑いと怒りでいつぱいになっていた。しかし、目の前で泣いている長男の涙も、私の気持ちと瓜ふたつの苦しさ、悲しさ、怒りを表しているではないか。私は、自分の苦しみを長男に負わせていると感じた。これ以上どうしようもない自分の人間としての器量の限界を感じながら、もう一度長男にあやまりなおした。長男は下を向いて泣きつづけていた。私は、自分の無力さをつきつけられる気がし、逃げるようにして家を出た。

子どもは大人を支えようとする

駅に向かって歩きながら、まだ、さっきのことを考えていた。この一週間、私は話しかけてくる長男をいつもよりしつこいと感じた。あれは、長男が単に私の不機嫌を耐えるだけでは

く、なんとか私の気分を変えようとし、私を支えようとしていたのではないか。

そう考えると、さきほどの長男は、父親にとってなんの支えにもならなかった自分の無力を泣いていたのではないかと思えてきた。支えようとする自分の気持ちがあるで伝わらず、いつまでも怒っている父親に怒ったのではないか。(お父さんが怒っていることぐらいとつきの昔に知ってたよ。苦しいんだって、悲しいんだって知ってたよ。そんなことは一緒に暮らしていればすぐわかっちゃうよ。ぼくや弟と楽しく遊ぼうよ。そしたらお父さん元気になるかもしれないじゃないか。でもだめなんだね。ぼくにはお父さんを助けるなんの力もないってことなんだね。お父さん、お父さんにとってぼくはいいなんなのさ。ぼくはいいほうがいいの?) あれは、そういう泣き方だったのだ。そ



こまで考えて、長男の気持ちがやっと納得できた気がした。

支えることと支えられること・愛することと愛されることは、一緒に生きる人にとってはひとつながりのこと

子どもと一緒に暮らしていると、私の感情が子どもに移ってしまったと感じることがしばしばある。はじめのうちは不可解に思えたが、いまは当たり前なことと思うようになった。子ども

もは私の想像を越えて私の心に共振する。そうして、私が苦しんでいるときは、私を支えようとし、苦しむ。子どもにとっては、「支えること」と「支えられること」は正反対のことからではない。「愛すること」と「愛されること」まで含めて、それらはひとつながりのことなのだ。子どもは愛されようとするので私を支えようとする。その気持ちに応えるとき、私は支えられる。言葉で言うとは厄介になるのは、我々が人間をひとりひとり孤立した生命として考える見方に慣れているせいであろう。事實は平明なのだが。

一月ほど前、田舎に独りで暮らす老母が癌にかかっていることがわかった。別れが近いことを意識しながら、週末に飛行機で田舎の病院と都会のあいだを行き来する生活がはじまった。自分の中でもすでに老いがはじまっていること

も感じるようになった。心弱り、体は疲れ果てて家に帰りつくとき、子どもはなんの疑いもなく、心をひろげてウルトラマンごっこに私をさそい、本を読んでとせがむ。あとになんにも残らない子どもの動き、小さなしぐさ、喜びの表情それ自体が、命の一滴一滴だと痛切に感じられる。子どもに自分の生命がはげまされるのを感じている。

(愛育養護学校)